Believe～また会うその日まで～

真・破綴密苦魔王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Believe～また会うその日まで～

【Nコード】
N7003X

【作者名】
真・破織密苦魔王

【あらすじ】
ここ五月雨高校に財布を忘れた立川（たてかわ）透（とおる）、16歳。財布を取り戻した後、先生の居ない職員室を覗くことに。そこで見た光景とは・・・。

第1話　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ（前書き）

半・独立してパワーアップした（？）真・破綴密苦魔王のデビュー作の改良というか物語そのものが変わったもの。最後まで見ていただけると幸いです。それでは、どうぞ！

第1話　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ

「財布忘れたあああああ！！」

　彼は立川　透、１６歳。この年になって、学校に財布を忘れたのだ。ちなみに、気付いたのは午後8時。ちなみに、既に家を出て一人暮らしをしている。

「この雨の中行かないといけないのか……。でも、取りに行かなきゃ盗られるしな……。よし、行くか。」

　外は嵐。この天気で取りに行くなど、無謀もいいところだ。透は自分の傘を一瞬で駄目にしながら、学校に向かった。普通なら、１０分で辿り着くものを、３０分もかけてやっと辿り着いた。

「やっと着いた。8時半か……。取り敢えず、インターホンっと。」

　ピンポーン。反応がない。もう一度、ピンポーン。やはり、反応がない。

「おかしいな……。先生居ないのかな。鍵も閉まってるし……ん、開いてる、ラッキー！」

　普通なら、ここで疑うはずだ。怪しい、と。しかし、常人とは比肩出来ない危険感知度の無さを持つ透は、気にせず進んで行く。イケメンで成績優秀、運動神経も抜群といった完璧な人間なのに、このアホっぷりで急速に意味を無くす。

「急ごう！待ってろ、俺の財布！うおぉぉぉぉ！」

　彼の教室は２－B。昇

降口から入ってすぐの場所だ。勿論、気合を入れる様な距離じゃない。

「よし、財布は見つかった。それにしても、この学校の教室の配置はどうなってるんだ……。そうだ、どうせなら、先生の居ない職員室でも覗くか。」

職員室は２－Ｂの隣だ。透は、ドアに近づき、開いた。

「どんなもんかな……。そ～れ！」

そこには、信じられない光景が広がっていた。血で染まった床、その上に倒れている先生たち。そして、そこには、一人の少女が……。

「あ、透君！待ってたよ……！これ、全部私がやったんだよ、凄いでしょ？憎き教師を殺ったんだから、私ヒーローよね？」

倒れている先生の上に座っている少女が、不気味に笑いながら言い放った。

「何だよこれ……。ていうか、誰だよあんたは？」

全身の震えが止まらないまま、透は返事をした。感知度の無い透でも、状況を掴めた。

「震えちゃって、カワイイなあ。安心して、私が遊んであげる。」

震える透を笑いながら、徐々に透に迫っていく。

「来るな来るなあああ……んんんんん！」

鎌太の口は、彼女の唇で塞がれた。

「………。今までずっと好きだったんです……。付き合ってください！」

（いやいや、こんな状況で告白？嘘だろ？だってだってさ、殺人鬼だよ！？いくら声の質といいルックスといい俺の理想にドストライクだけど、これを運命の出会いとしていいのか？いやでも、超タイプだ……。これを逃したら次はない。よし、決めた！俺はアホだ、それでいい！）

「こちらこそよろしくお願いします。こんな僕で良ければ！」

ここにきて最高のドヤ顔。少し照れながらも、この上ない極上のドヤ顔が隠れることなく出ている。

「ありがとうございますっ！」

「それじゃあ早速、家に来る？」

と彼女を誘う。が、

「そんな、とんでもないです！あ、そうだ、家に来ませんか？私一人暮らしですし、家は割と広いので……。」

と大きく首を振ってから、逆に透が誘われた。

「い、いいんですか？そんな事。」

「いいの。普段人入れないから。それより、早くいきましょう！夜、いろいろし

たいですから……。キャッ？」

「なにを考えているんですか……。付き合ってすぐにｓ……。ゴホン、何でもないです。」

「透君、今いやらしい事考えてたでしょ！まさか付き合ってすぐにピーーーなんて……。はっ！」自分のした失態に気付き、顔を隠す。しかし、湯気の立ちそうな顔の赤さは隠せなかった。

「いやあああああああ！ご、ごめんなさい……。私ったら、なんてことを……。さあ、行きましょう！」

そそくさと歩き出す彼女。それを止めるかのように、

「名前を教えてくださ……。」

と言いかけたら、彼女は半泣きになりながら、

「後で教えるから！うわああああああああん！」

と叫びながら走っていってしまった。

「待ってよ、道知らないんだから！」

彼女に続いて走り出す透。

（よほど恥ずかしかったんだ……。）

こうして、スーパーエリートと殺人鬼の恋愛（？）物語が始まる。

第1話　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。読みにくいと思います。初心者なのですいません。ということで学校の紹介でも。（学校については本編から抜けてしまったので、その埋め合わせ。）五月雨高校・・・ごく一般の高校。普通に勉強していれば受かる。

立川（たてかわ）　透（とおる）・・・１６歳　身長・・・１６４ｃｍ　体重・・・５４ｋｇ　黒髪の、自他共に認める超イケメン。成績優秀、運動神経抜群といった、完璧な美少年なのだが……。

第2話　Ｎｉｇｈｔ（前書き）

前回の続き。それでは、どうぞ！

第2話　Night

歩き始めて20分、彼女の家に着いた。彼女の家は、とても家という大きさではない。周りが山や森ということもあって、家というより、　別荘だ。神々しいまでの白色が、よりこの建物を際立たせている。

「ここですか……。それにしても、大きいです。」

「そうでしょ。今までずっと一人暮らしをしてたから、使ってないスペースとかいろいろあったけど、もう大丈夫、透君が居るもん！」

「何か嬉しいです……。」

少し照れながらも、悲しげな顔になる透。それに気付いたのか、

「ご、ごめんなさい！別に一人で寂しかったわけじゃないよ、一人でも楽しいこと沢山あったんだから！あったんだから……。それに……って雰囲気暗くなっちゃたじゃん、話の続きは家はいってからゆっくりしよう、ね！」

彼女は笑う、おそらく作り笑顔だろう。透ですら分かった。彼女の背負っているものの大きさが。

「……分かりました。じゃあ、お邪魔します。」

「どうぞ。あ、そうだ、これからは二人で暮らすから入るときは『ただいま』だよ？」

「分かった……って、え、二人で暮らすって、その…

…、アレ？」

「アレだよ、アレ。いわゆる、同居？でも、改めて考えてみると、恥ずかしいものね。」

彼女は少しだけ顔を赤らめた。

「本当か！？一緒に暮らすのか？」

透は驚きを隠せない。色々な事がいっぺんに起きて、頭が今にもパンクしそうだ。

「そう、一緒に暮らすの。一緒に出かけて、一緒にご飯食べて、一緒にテレビを見て、一緒にしゃべって、一緒に寝て……勿論服は脱いで生まれたままの……今のナシ！はあ……。」

「それって願望じゃない？」

一言で彼女の失言を切る。と、彼女はさっき以上に顔を赤らめながらあたふたしながら、勢い余って尻餅を付いた。

「わわっ！そ、そ、そんな事、あ、あるわけないじゃん！あるわけ……ある。」

図星だ。

「あるのかよ！でもまあ、少しは……。いや、何でもない。」

「今、少しはって言った？少しはって言ったよね！やったー！今ごろ言うのも悪いけど、私の名前、笹倉　麻衣っていうの。それと、さっきまで気を遣ってくれてたけど、できれば敬語はやめて、何か離れてる感じがするから。私のことは、麻衣って呼んで。そこんとこ、ヨロシクッ！」

ちょっとミスった発言をした

後、麻衣は急にげんきになって、目をキラキラ輝かせた。本当にこの発言で元気になっていいのか……。

「ま、麻衣、とりあえず、荷物を家から持ってきていいか？一緒に暮らす上で、色々必要だろうし。」

「分かった。あと、透君が今住んでるアパートを出る手続きとかあるんでしょ？今日の内に済ませよう、私も手伝うから！」

「ありがとう。よし、終わったら……わかるな？おっと、その前にご飯食べないと。元気でないからな！まあ、そのあとゆっくり、だな。」

「むう……。」

頬を少し膨らませて、不満げな麻衣だった。

第2話　Ｎｉｇｈｔ（後書き）

笹倉（ささくら）　麻衣（まい）１５歳。　身長・・・１５８ｃｍ　体重・・・麻衣「女の子に対してその質問？勿論教えないもん！」茶初のロングで腰の上当たりまですらっと伸びた髪、グラマラスな体のライン。まさに美少女。性格も明るいが、その過去が……。

第3話　Ｋｏｃｋｉｎｇ（前書き）

前回の続きです。それでは、どうぞ！

第3話　Kocking

2時間後、ようやく粗方の事は片付いた。時計を見ると、既に23時半を回っていた。荷物運び等ですっかり体力を使い果たしてしまった、透は床に寝そべっている。隣では麻衣も同様、床に寝そべっていた。

「ふう～。やっと終わった……。もう腹減って動けない。早くご飯にしよう。」

「そうね……。今日は何を作ろうか……。適当にパスタでいい？」

麻衣がぼそっと呟く。

「麻衣って料理出来るんだ～。そういう事もできるなんて、やっぱり女の子はこうでなくっちゃ！ってつくづく思う。」

「まあ、一人暮らしだし、これ位の事は自然に出来るようになるよ。」

褒められて、まんざらでもない様子の麻衣。

「じゃあ、出来上がるのを待つよ。楽しみだな～麻衣の手・料・理♪」

「ヤダなあ、あまり期待しないでよ。でも、心は込めるからね！」

麻衣は少し上機嫌な様子で、キッチンへ向かった。

透は調理の様子を眺めていた。凄い、まるで手際が違う。パスタを茹でている間に、サラダなどを作っていく。同じ一人暮らしだった俺でも比べ物にならない。これは食べるのが楽しみだ。そんな事を考えている内に、出来上がったナポリタンと、サラダが机に並

んでいた。

「お、美味そうだな～。早く食べよう♪」

「そうだね。じゃあ早速、頂きます！」

麻衣がそう言うと、透もつられて頂きます、と言う。

「美味いよ、見た目通り、いや、それ以上だよ。」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいな。」

ニコッと笑う麻衣。

「この雰囲気の中聞きにくいんだけどさ……。」

と、急に重い口を開いた様な口調で話す透。その急な反応に麻衣はキョトンとしている。

「この雰囲気の中聞きにくいんだけどさ、学校でのことなんだけど……。アレってやっぱり……。麻衣がやったのか？」

当然と言えば当然の質問だ。あれだけの物を見て疑問を抱かずに入られないはずだ。聞くタイミングは、おそらく普通より遥に遅いのだが。しかし、透の予想していた2つの答とはまた違う、意外な答だった。

「あ～、その事ね。実は、透君には悪いけど、アレはいわゆる……ドッキリ

なの。先生公認のね。本当にごめんね！」

その瞬間、透の頭は真っ白になった。え、嘘だろ！？まさか、アレがドッキリ！？だって、床血の海だったんだよ！？先生死んじゃってたよ！思い返せばおかしな事ばかりだったけど……殺人までもがあの、アレだって言うのか？そんな馬鹿な！じゃああの告白も！？ていうか何でこんな物を認めてしまうんだこの学校は！この学校は教室の配置だけでなく、先生の頭もおかしいのか！？俺はなんて事を……。

「じゃ、じゃあ、告白も……。」

そう言って崩れて膝を付く透。それを見て若干慌てる麻衣。

「いや、このドッキリ、実はね、告白のためのドッキリなの。この学校ってさ、相談室があって、カウンセラーの人がいるでしょ。その人に相談して、先生にも言うと、手伝ってくれるって言ってくれたの。それで……。」

麻衣が俯きながら顔を赤く染めていく。

「それで考えた末にこれをやったのか……。」

「う、うん……。」

「いや、まさか財布を忘れたから学校に行って、こんな事になるなんてな。あんな状況ではとても冷静になんてとてもじゃないけど無理だな。もしかして、

これも全部仕組まれてたりな、ハハッ。」

自分の状況に呆れて笑ってしまう透。

「残念ですが、財布から全部仕込みまくりですよ♪あと、知ってましたか？ここ五月雨高校は、恋でも有名な学校なんですよ。成就率１００％とかなんとかで。そして私たちもその仲間入りですよ！」

嬉しそうにはしゃぐ麻衣。思わず透も顔がほころぶ。

「それを聞いて安心した。この恋は本物なんでしょ？良かったよ、君みたいな人と巡り会えて。」

透の言葉を聞いて、麻衣の顔の赤さが頂点に達した。そして、麻衣が透に飛び込んだ。

「ありがとう！これから、永遠を誓える仲になれる日を、そしていつかの透君の言葉を、待ってる！」

「麻衣……。」

透の胸の中で呟く麻衣。そして麻衣を、静かに、優しく抱きしめた。そして、そのまま吸い込まれるように二人とも床で眠ってしまった……。

第3話　Ｋｏｃｋｉｎｇ（後書き）

どう発展させようか……。難しい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7003x/

Believe～また会うその日まで～

2011年12月1日23時55分発行